

C-牽引と公的自己中心性の度合い*

和田 尚 明

キーワード：私的自己・公的自己中心性、C-牽引、話者意識、時制構造、現在時の磁場

1 はじめに

言語間の文法現象の違いを説明するために、これまで様々な観点から様々な提案がなされてきたが、最近になって話者概念の解体という観点から、日本語と英語の言語的本質に迫ろうとする試みが、Hirose (1995, 2000, 2002)、廣瀬 (1997)、廣瀬・長谷川 (2001) などによってなされている。これらの研究においては、英語は公的自己中心の言語に分類されるのに対し、日本語は私的自己中心の言語に分類される。この分類の主な根拠の1つとして、英語には公的自己を表す専用の言葉であるIが存在するが私的自己を表す専用の言葉はなく、対照的に、日本語には私的自己を表す専用の言葉「自分」が存在するが公的自己を表す専用の言葉はない、という主張がなされている。この考えを他言語にも適用すれば、例えば、ドイツ語には、英語と同様、公的自己を表す専用の言葉ichはあるが私的自己を表す専用の言葉はないので、公的自己中心の言語ということになる。

また、和田 (2002)・Wada (2004) では、人称・数に応じて変化する時制屈折辞（または、時制形態素）をもつ英語の時制体系は英語の公的自己中心性を支持する時制構造になっているのに対し、そのような屈折変化のない日本語の時制体系は日本語の私的自己中心性を支持する時制構造になっているという主張がなされている。この考えに従えば、英語と同じく西ゲルマン語族に属し、人称・数に応じて変化する時制屈折辞をもつドイツ語は、時制構造の観点からも公的自己中心の言語ということになる。

では、ドイツ語はいつも英語と同じような文法現象を示すかということ、そのようなことはない。とりわけ、時制現象に限って言えば、英語とドイツ語では大きな差が見られる。なぜ、同じ公的自己中心の言語であり、同じく公的自己中心性を支持する時制構造体系をもつ両言語の（定形述語の）時制現象が異なるのであろうか。本稿では、この問いに答えるために、「意識主体 (Speaker's Consciousness) への牽引 (Gravitation)」という概念（以下、C-牽引）を導入する。そして、このC-牽引という概念が、英語の文法において「現在時」が特異なステータスをもつ状況に至った主因であることを論証し、その結果英語とドイツ語の時制現象に差異が生じていると主張する。

本稿の構成は、以下の通りである。第2節では、まず、何をもって公的自己中心の言語、私的自己中心の言語と述べているのかを、日本語と英語を引き合いに出して考察する。この節では、また、本稿の時制現象を説明する枠組みとして、Wada (2001) や和田 (2001a) で提案された時制理論の概観も行い、時制構造の観点からも日本語の私的自己中心性・英語の公的自己中心性は支持され

ることを示す。第3節では、公的自己中心の言語に分類されることになる英語とドイツ語の時制現象において、共通する現象（時間節中における時制形式選択）と異なる現象（間接話法補部中における時制形式選択）をそれぞれ提示する。第4節では、第3節で見た英語とドイツ語の違いを説明するために必要なC-牽引という概念を導入し、なぜ英語とドイツ語の間接話法補部の時制現象に差が生じるのかを説明する。第5節では、C-牽引による説明が、英語とドイツ語の他の時制現象の相違、すなわち、(1)現在完了形が指し示す意味機能の範囲の相違、(2)現在完了形の文文化の程度の差、(3)(現在)進行形の有無、(4)単純現在形の未来時指示の起こりやすさ、をも説明できることを論証し、本稿の主張の妥当性を高める。第6節は、本稿の主張点の要点をまとめる。

2 私的自己中心の言語と公的自己中心の言語

2.1 人称代名詞（類）の分布による私的自己・公的自己中心性の区別

Hiroseの一連の研究では、自然言語には私的表現（Private Expression）と公的表現（Public Expression）の2つの表現レベルがあると仮定されている。前者が「話者の思考・心的表示を表すための表現レベルで、聞き手を想定しない言語表現レベル」であるのに対し、後者は「話者の言語による伝達機能を担う表現レベルで、聞き手の存在を前提とする言語表現レベル」であると定義されている。そして、それぞれの言語表現レベルの表現活動を行う主体を、私的自己（Private Self）と公的自己（Public Self）と呼んでいる。この2つのレベルが存在する言語は、どちらの言語機能がより本質的かという立場から、「自己を他者（特に、聞き手）よりも優位におく」という意味での私的自己中心の言語と「自己と他者を対等の立場におく」という意味での公的自己中心の言語に分けられる。

この観点から、日英語を比較すると、日本語は私的自己中心の言語であるのに対し、英語は公的自己中心の言語ということになる。その根拠として、人称代名詞（類）の分布の観点から、日本語には私的自己専用の言葉である「自分」が存在するが公的自己専用の言葉がないのに対して、英語には公的自己専用の言葉であるIが存在するが私的自己専用の言葉がない、という点が挙げられている。

まず、日本語についての主張の根拠を、Hirose (2002) に沿って見てみる。

(1) a. 自分は天才だという意識

b. ??{僕 / 私}は天才だという意識

「～という意識」で表される言語環境は、聞き手を想定していない、当該意識主体の内的世界を表す環境であり、そこに生ずる表現は定義上私的表現となる。ここで大切なのは、この場合の当該意識主体は、性別や社会的地位に関係なく「自分」で表されているという点である。一方、(1a)に比べて(1b)は、適切な文脈を与えない限り不自然である。これは、代名詞的表現である「僕」、「私」、「俺」、「わたくし」などは、聞き手との対人的・社会的関係に応じて話者が自己を指すのに使い分ける言葉であり、聞き手を想定する言葉である以上、公的自己を表す言葉と考えられるが、

「～という意識」で表される言語環境が私的表現を要求すると矛盾するためである。

ちなみに(1b)が容認されるのは、(2)に示すように、意識の内容を他者に伝えようとする伝達的な状況においてのみである。

(2) {a. 僕 / b. 私}が、{a. 僕 / b. 私}は天才だという意識に気づいたのは、ちょうどその時だった。

(2)のような文脈に埋め込まれた時、当該言語環境内で「僕」や「私」が容認されるのは、その意識内容の伝達主体である公的自己(最初の「僕」や「私」)が明示されているからであり、その結果当該環境は公的自己を許す環境になっているからである。(1b)が不自然なのは、そのままではそのような伝達主体を想定しにくいからと言える。

以上の観察から、日本語は私的自己を指す専用の言葉・「自分」をもつが、聞き手との対人的・社会的関係に関係なく、絶対的に公的自己を指す専用の言葉はないと考えられる。

対照的に英語には、公的自己を表す専用の言葉はあるが、私的自己を表す専用の言葉はないと言える。このことは、次のパラダイムによって明らかである。

(3) {I/You/Ryoko} said to {Tibbie/the boss/Mother}, "I am lonely."

(4) {I/You/Ryoko} thought that {I/you/she} {was/were} lonely.

(3)の直接話法補部では、元話者の人称に関係なく、また聞き手との社会的関係に関係なく、自らを指す言葉は必ずIである。直接話法補部の表現は、元話者が被伝達者に向けて語った言葉をそのまま引用しているので、定義上聞き手への志向性を含む公的表現であり、その表現活動の主体を指すIは公的自己を指す専用の言葉ということになる。また、英語に私的自己を指す専用の言葉がないことは、(4)から分かる。思考動詞thinkの補部には、元話者が伝えようとしていたオリジナルの思い(思考内容)・心的表示がくるので、この環境は原則的に言語の思考レベルである私的表現の引用と言える。この私的表現の思考主体を指す言葉は、元話者(元思考者)が表す人称に応じて変化することから、日本語の「自分」に対応するような私的自己を指す専用の言葉は、英語には存在しないと言える。

主節動詞がsayなどの発話動詞の場合も、間接話法補部は私的表現の引用と言える。なぜなら、間接話法補部が元話者のオリジナルの発言そのものを表している必要はなく、元話者が伝えたかっと思われる思考内容、すなわち、概念レベルの伝達内容を表していると言えるからである (cf. Chafe 1994のReplica vs. Reconstitution)。このことは、例えば、元話者Maryが "John is fantastic, you know."と発言したのを受けて、伝達者が間接話法を用いて、"Mary said that John was a great man."と述べるのが可能ということからも分かる。この間接話法補部は、伝達者が元話者Maryの実際の発話の背後にある伝えたかった意味内容・心的表示を汲み取り、それを聞き手に伝えている部分だからである。

2.2 時制構造の違いによる私的自己・公的自己中心性の区別

日本語が私的自己中心の言語、英語が公的自己中心の言語であることは、両言語の時制構造からも裏付けられる。この点は、Wada の一連の研究で提案されている時制理論によって論証することができる (Wada 2001, 和田 2001a)。

そこでは、日本語と英語の定形動詞 (述語) の時制構造に関して、次のような仮説が提案されている。

- (5) 英語の定形述語の時制構造は絶対時制部門と相対時制部門からなるが、日本語の定形述語の時制構造は相対時制部門のみからなる。

絶対時制部門とは、人称・数と一体化した時制屈折辞の表す時間区域 (Time-sphere)、すなわち文法体系に組み込まれた時間帯が関係する部門で、英語には、時制形式の使用責任者である話者の時制現象に関する視点 (Speaker's Temporal Viewpoint = V_{SPK}) (以下、単に話者視点) を含む区域である現在時区域と含まない区域である過去時区域の2つの時間区域がある。この話者視点は時制形式によって表されるあらゆる時間関係の計算の絶対的出発点であり、通例発話時に存在する話者意識 (Speaker's Consciousness = C_{SPK}) と融合する。それゆえ、この話者視点を含む時制部門が「絶対」という名をもつ。一方、日本語の定形述語は人称・数と一体化した時制屈折辞をもたないので、定義上絶対時制部門を含まない。相対時制部門とは、述語の出来事時の表す時間値が関係する部門で、定形述語の場合は時間区域決定後、非定形述語の場合は基準点決定後にその値が定まるプロセスが始まるので、「相対」の名をもつ。

具体例で、考えてみよう。

- (6) a. John is sick today. / b. Mary was happy yesterday.

- (7) a. 恵理は今病気である。 / b. 文也は昨日幸せだった。

それぞれの下線部が定形述語であるが、以後日本語のいわゆる現在形と過去形を「ル」形と「タ」形と呼ぶことにする (各々、典型的に語尾が -ru と -ta で終わるのでこう呼ぶが、「ル」形には -u、-i、-da で終わる現在形も、「タ」形には -da で終わる過去形も含まれる)。これは、上で述べたように、日英語の定形述語の時制構造が異なるのを、名称にも反映させるためである。(6b) では、過去時区域がまず話者 (そして、聞き手) の頭の中で想起・確立され、話者視点が発話時 (Speech Time = S) に固定されるプロセスを経た後、過去時区域は (意味概念的時間帯である) 過去時を指すことになる。そして、その中に当該述語が表す状況の関連部分が当てはまる時間、すなわち出来事時 (Event Time = E) が含まれる。それゆえ、結果的に出来事時は発話時から見て過去に来ることになる。(図1参照。)

一方(7b)の日本語の下線部が引かれた述語には過去時区域は存在せず、出来事時は、その値の計算のために必要な任意の基準点を直接要求する。ここでは、独立節という環境から、基準点は発話時と解釈され、結果的に出来事時は過去時に生ずる。(図2参照。)

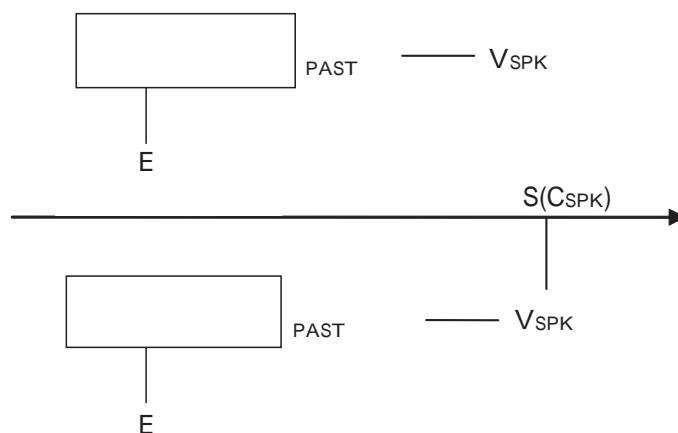


図 1：過去形の時制構造と独立節での無標の時制解釈パターン

E ----- (O) E ----- S

図 2：「タ」形の時制構造と独立節での無標の時制解釈パターン

細かい部分を捨象してまとめれば、英語の定形述語の場合は、通例話者視点と話者意識が発話時において融合するので、(過去形か現在形かの) 時制形式の選択は発話時基準で行われるが、日本語の定形述語の時制構造には話者視点が含まれていないので、「タ」形か「ル」形かの) 時制形式選択の基準点はそれが生じる言語環境に依存すると言える。これを、われわれの時制理論の枠組みで述べ直すと、時制形式の選択のための基準点決定に関しては、英語の場合、時制構造に関する情報と他の文法分野に関する情報のインターフェイスである時制解釈レベルにおいて、他の文法分野の本質や特徴(例えば、それが生じる言語環境のそれ)の影響を基本的には受けないのに対し、日本語は環境依存的な特質を備えているために、大いに影響を受けると言うことになる。

この主張の妥当性は、以下の下線部が引かれた述部に関する日英語の時制現象の相違を説明できることから分かる。

(8) a. After Lottie runs 100 meters, I will run 200 meters.

b. 尚子が百メートル走った後で、僕が二百メートル走るだろう。

(9) a. Before Steffie arrived there, Bert left the hotel.

b. 陽子がホテルに着く前に、徹はそこを出発した。

日本語では、その時制形式選択に関する環境依存的な特質のために、主節に意味的に従属するタイプの従属節に生じる時制形式の選択の基準点は、通例主節時となる。つまり、「タ」形は主節時に比べて過去を、「ル」形は主節時に比べて非過去を指す(「ル」形は、非状態的狀況を表す場合は未

来時、状態的状况を表す場合は現在時を指す傾向にある)。一方、英語では、原則として話者の視点と意識の融合が(同一人物の視点と意識が同一時空間を占めるのが無標であるので)時制構造的に要求されるため、生じる環境に関係なく、基本的に話者意識のある発話時を基準点にした時制形式の選択がなされる。

この事実は、英語が公的自己中心の言語、日本語が私的自己中心の言語であるということの傍証になる。英語において、発話時に固定することになる話者視点の帰属先(当該時制形式を用いる主体)は、コミュニケーション・モードの場合、文(発話)全体を誰かに伝達する伝達者としての話者であり、公的自己として記述されている。無標の場合、言語環境にかかわらず公的自己としての話者へと引き付けられる話者視点を含む時制構造を英語がもっているということは、英語が公的自己中心の言語であることを支持することになる。一方、日本語の時制形式の選択が必ずしも公的自己として記述される伝達話者の視点からなされる必要がなく、その結果、(時制解釈レベルにおいて)時制形式が生じる言語環境の特徴によって時制形式選択の基準点の決定が左右されるということは、日本語の時制構造が公的自己中心の言語のそれを表すものでないことを示す。それゆえ、日本語が私的自己中心の言語であることと矛盾しないことになる。

ここでの主張は、私的表現の引用であった間接話法補部の日英語の時制現象の相違によって、さらに裏付けられる。公的自己中心の言語ゆえ、英語では公的自己としての伝達者の視点から時制形式の選択がなされるが、私的自己中心の言語である日本語では、私的自己としての元話者の視点から時制形式の選択がなされるからである(「涼子は自分はさみしいと思った。」は“Ryoko thought that she was lonely.”に対応)。

3 ドイツ語は公的自己中心の言語か、それとも、私的自己中心の言語か

3.1 公的自己中心の言語としてのドイツ語

2節で取り上げた人称代名詞(類)の分布と定形述語の時制構造という観点からドイツ語を見ると、ドイツ語は英語と同様に公的自己中心の言語ということになる。まず、ドイツ語の人称代名詞の使われ方であるが、英語のそれと同じである。

- (10) a. Ich sagte zu {Bekkie/dem Lehrer/meiner Mutter}: „Ich fühle mich so einsam.“
 b. Du sagtest zu {Bekkie/dem Lehrer/deiner Mutter}: „Ich fühle mich so einsam.“
 c. Patrick sagte zu {Bekkie/dem Lehrer/seiner Mutter}: „Ich fühle mich so einsam.“
 d. Sie sagten zu {Bekkie/dem Lehrer/ihrer Mutter}: „Wir fühlen uns so einsam.“
- (11) a. Ich {dachte/sagte}, dass ich mich so einsam fühle.¹
 b. Du {dachtest/sagtest}, dass du dich so einsam fühlst.
 c. Patrick {dachte/sagte}, dass er sich so einsam fühle.

d. Sie {dachten/sagten}, dass sie sich so einsam fühlen.

(10a-c) の直接話法補部では、元話者の人称に関係なく、また聞き手が誰であるかに関係なく、自己を指す言葉は必ずichである。英語の場合で見たように、直接話法補部はその言語環境の特徴上公的表現の引用なので、その表現活動の主体を絶対的に指すichは公的自己を指す専用の言葉と言える。また、ドイツ語に私的自己を指す専用の言葉がないことは、(11a-c) から分かる。2節で見たように、間接話法補部には元話者がもともと伝えようとしていた思考内容がくるので、この環境は原則的に、言語の思考レベルに対応する私的表現の引用である。この私的表現の表す内容の思考主体を指す言葉は、元話者（元思考者）が表す人称に応じて変化することから相対的であり、英語と同様、ドイツ語にも私的自己を指す専用の言葉は存在しないと言える。

時制構造の観点からも、ドイツ語は公的自己中心の言語であることが分かる。(10)(11)から明らかのように、ドイツ語の定形述語は人称・数と一体化した時制屈折辞をもつ。これは、われわれの時制理論では、絶対時制部門において時間区域を想起・確立する要素であり、この部門に話者視点が含まれる（ここでは、とりあえず直説法時制形式のことを想定している）。この時制構造は、英語のそれと同じであり、時制構造の観点からもドイツ語は公的自己中心の言語と言える。

3.2 英語とドイツ語の時制現象の類似点と相違点

もしこの主張が正しいならば、ドイツ語の時制現象は英語のそれと同じ振る舞いをすることが予測される。例えば、英語の場合、たとえ（意味的に主節に従属する）従属節中であっても、その公的自己中心性を反映する時制構造の特性から時制形式は発話時基準で選択されるが、ドイツ語の場合も同様になることが予測される。事実、以下の時間節において、ドイツ語の定形述語の時制形式選択は発話時基準になっている。

(12) a. Ich kam nach Hause, bevor Vater da war.

(私は、父が帰宅する前に帰宅した。)

(『独和大辞典』p.365)

b. Nachdem er seine Prüfung abgelegt hat, wird er ins Ausland gehe.

(彼は試験をすませた後で、外国に行く(だろう)。)

(『独和大辞典』p.1586)

下線部が示すように、時間節中の定形述語は、主節中の定形述語と同じ時制形式が使われている。これは、英語同様、発話時基準で時間節中の時制形式の選択が行われているためである(cf.(8a)・(9a))。

しかし、間接話法補部ではどうであろうか。英語と同じ時制現象を示すのであれば、いわゆる時制の一致があるはずである。しかし、以下の例が示すように、ドイツ語の間接話法補部には時制の一致が存在しない例が多々ある。

(13) a. Lottie sagte, dass sie glücklich sei.

(ロツティは、自分は幸せだと言った。)

b. Stijn sagte, dass er seine Schwester das Buch kaufen müsse .

(シュテインは、自分は妹のためにその本を買わなければならないと言った。)

(13a, b) では、接続法と呼ばれる μ -モードが使われていて、英語のような直説法の使用による時制の一致はない。(上で見た(11)も、このことを示す例である。)

では、ドイツ語の間接話法補部には、英語のように直説法が使われないかということ、そうではない。(14)では接続法I式のsei、接続法II式のwäreに加えて、直説法のistが用いられている。

(14) a. Er sagte, dass er krank {ist/sei/wäre}.

(彼は、自分は病気であると言った。)

(『現代ドイツ文法』 p.207)

b. Er behauptete, dass die Winkelsumme eines Dreiecks 190° {ist/sei/wäre}.

(彼は、その三角形の内角の和は190度だと主張した。)

(d' Alquen 1997: 166)

しかし、ここで注意すべきは、元話者の発話時(主節時)から見た現在の出来事が直説法現在形で表されているので、英語で見られる主節と補文節の時制の一致がないという点である。すなわち、直接話法版の補文時制をそのまま受け継いでいるのである(d' Alquen 1997: 165)。

ただし、ドイツ語に時制の一致が全くないわけではない。

(15) a. Er sagte, dass er krank war.

(彼は、自分が病気であると言った。)

b. Fischer sagte mir, dass Trakl Kokain nahm. (d' Alquen 1997: 166)

(フィッシャーは私に、トラクルはコカインを使用していると言った。)

(15)から明らかなように、しばしばドイツ語でも時制の一致が生ずるのである。

さらに注意すべきは、ドイツ語にも、間接話法補部において直説法のみが許され、接続法が許されない場合があるという点である。

(16) Er wusste, dass er krank {war/(ist)/*sei/*wäre}.

(彼は、自分が病気であることを知っていた。)

(『現代ドイツ文法』 p.207)

このような特徴を示す動詞群はいわゆる叙実述語(Factive Predicate)であり、wissen 'know' の他に verstehen 'understand', vergessen 'forget', entschuldigen 'forgive' などがある(Eisenberg 1999: 117)。²

これらの事実をどう捉えればよいのだろうか。とりわけ、時制の一致が基本である英語と違って、同じ公的自己中心の言語であるドイツ語の間接話法補部における時制現象が上で見たように多岐にわたっているのは、なぜだろうか。

4 C-牽引と段階的概念としての公的自己中心性

4.1 C-牽引とは何か

4.1.1 C-牽引の定義

前節で見た疑問点に対する回答を与えるためには、C-牽引という概念の導入が必要である。

(17) “C-gravitation” is defined as a grammatical phenomenon in which grammaticalized forms and their semantic content or functions conceptually gravitate through time towards the spatio-temporal center on which the speaker’s consciousness is fixed. (C-牽引とは、文法化された形式やその意味内容・意味機能が、時間の経過とともに、話者の意識主体の存在する時空間へと概念的に引き寄せられる文法現象のことである。) ここでは、C-牽引が文法現象の時間的側面で発動するとどうなるかを、もう少し詳しく見ておこう。公的自己中心の言語において、発話時に存在する話者意識が活性化することで、文法化された時制形式 (いわゆる鑄型になったユニットのことで、be going toや完了形なども含む) やその意味内容・意味機能 (用法) である時間 (意味) 構造が発話時を中心とした時間帯、すなわち現在の磁場 (Gravitational Field) に引き寄せられる。ここで言う「活性化」とは、当該言語の文法体系においてその存在が卓立化することを指す。その結果、当該の時制形式やその表す意味構造・意味機能は、現在の磁場の影響下におかれるようになり、現在時性 (Presentness) という概念と密接に結びつくことになる。このプロセスが、C-牽引である。

4.1.2 他の認知的概念との相違

C-牽引による具体的な説明に入る前に、一見C-牽引と似たように見える概念をいくつか取り上げ、それらとの違いを明確にしておく。

まず、Langacker (1987, 1991, 1998) の「グラウンディング (Grounding)」であるが、これは以下のように定義されている (cf. Langacker 1998: 73)。

(18) グラウンディングとは、話者の存在する時空間 (グラウンド) に、客体的シーンに属するプロファイル (焦点化) されたものやプロセスを結びつけることである。プロセスとは動詞によって表される状況一般を指し、節のグラウンディングは、定形マーカがこの役割を担う。過去時制マーカ-*ed*や3人称単数現在時制マーカ-*s*は、その指示内容自体が話者 (1人称) の意識主体が存在する現在の磁場の影響下に引き寄せられるわけではない。また、グラウンディングは「時間の流れ」という概念とは関係しない。従って、C-牽引とは異なる概念である。

次に、Langacker (1990, 1991, 1998, 1999) の「主体化 (Subjectification)」を見てみよう。この概念には、古い定義と新しい定義の2種類がある。(19a) が古い定義で、(19b) が新しい定義である (cf. Langacker 1998: 73, 75)。

- (19) a. 主体化とは、意味変化もしくは意味拡張の1つで、もともと客体的に解釈されていた実体が、より主体的な解釈を受けるようになる過程のことを言う。
- b. 主体化とは、ある実体の概念化において、客体的関係を表す部分が消え去り、主体的関係を表す部分が残る現象のことを言う。

この概念を、Langackerはよく次のような例を挙げて説明している。

- (20) a. Matilda is sitting across the table.
 b. Matilda is sitting across the table from me
 c. Matilda is sitting across the table from Leon.

(20c) では、事象の客体的関係が記述されているだけである（あるいは、前面に押し出されている）が、(20b) はそのシーンに概念化主体 (Conceptualizer) である話者がかかわっている。しかし、この段階でもまだ話者は、代名詞化することで、客体化した自己を客体的関係に組み込んで記述しているのである。ところが (20a) は、主体である自己を表す言語的要素を含まず、客体的事象が主体と融合した状態ということになる。この状態が、いわゆる（最大限に）主体化した段階である。(19a) と (19b) の違いは、この状態になることを変化と捉えるか、本来的に二重構造だったものが一方が消えることで他方が表面化すると捉えるかの違いであり、主体化した段階自体の指す状況は本質的に同じと言ってよい。以上から、Langackerの主体化は、意識主体の存在する時空間の磁場に引き寄せられるが、必ずしも主体的関係を表すわけではないC-牽引とは、異なる概念であることが分かる。

最後に、Traugott (1989, 1995) の「主観化 (Subjectification)」との比較を行う。

- (21) 主観化とは、意味が徐々に命題に対する話者の主観的な信念の状態・態度に基づいたものに変化していく意味的・語用論的プロセスのことを言う。

この概念は、時間の流れの中で話者意識に結びついていくという点ではC-牽引と無関係ではないが、C-牽引は必ずしも（心的態度や心的表示に関連するという意味での）主観的な現象ではなく、意識主体の存在する時空間の磁場に引き寄せられれば、客観的な現象であってもかまわない。それゆえ、Traugottの主観化もC-牽引とは異なる概念であると言える。

以上、C-牽引と似ているように見える従来の概念との比較を行い、異なる概念であることを見てきた。次節では、同じ公的自己中心の言語であるはずのドイツ語と英語の間で間接話法補部の時制現象が異なるのはなぜかを、C-牽引の観点から説明する。

4.2 C-牽引のメカニズム

まず、今一度具体例の確認から始めてみよう。次の例は、主節時と補文時の同時性を表している。

- (22) a. Hannie sagte, dass sie krank {ist/sei/wäre}.
 (ハニーは、自分は病気だと言った。)
 b. Der Journalist sagte, Schiller {ist/sei/wäre} der größte deutsche Dichter.
 (そのジャーナリストは、シラーがドイツ最大の詩人であると言った。)

- (23) a. Hannie said that she was sick.
 b. The journalist said that Schiller was the greatest German poet.

歴史的に見ると、接続法は基本的には、ものごとを事実として描写するのではなく、話者の心の中に存在する概念として描写する手段である (Curme 1970: 216)。それゆえ、2節で見た「間接話

法補部は私的表現の引用である」という言語環境の特徴から、間接話法補部で接続法が用いられると、元話者の概念レベル（心の中）の伝達内容を表すための形式として機能することになる。換言すれば、ここでの接続法は、補文内容の描写が私的自己としての元話者の視点に基づいて（依拠して）選択されていることを示す形式と言える。この主張を支える根拠として、まず、補文標識dassがない場合は直説法より接続法が好まれることが挙げられる。接続法を用いることで当該部分が元話者（主節の主語）の視点に依存していることを示せるので、補文標識がなくてもかまわないと言えるからである。また、いわゆる独立的（自由）間接話法においては接続法しか許されないことも根拠となる。この部分の状況描写が登場人物の思考世界を表すことから、接続法は元話者（思考者）としての登場人物の視点に依存した状況描写に用いられる形式であると言えるからである。ここでのわれわれの主張は、接続法がしばしば直説法と違って、伝達話者が補文内容の事実性に関与しない場合に用いられることから支持される。³ この場合、形式選択だけでなく補文の意味内容自体を測る際にも、伝達話者視点ではなく元話者視点で行われることが多い、すなわち、元話者視点が基本であるということを示しているからである。ドイツ語において接続法という元話者の概念（心的表示）を表す形式が発達しているということは、このような形で表される言語環境がドイツ語においては有標であることを示していると言える。すなわち、ドイツ語は私的表現部が有標となる公的自己中心の言語と言える。このことは、私的自己中心の言語である日本語に接続法がないことから裏付けられる。

われわれの時制理論では、接続法使用のメカニズムは次のようになる。接続法でマークされた述語の表す時制屈折辞は、直説法の場合の過去時区域や現在時区域とは異なり、式・式共に無指定の文法的時間帯を想起・確立する。これは、時間的側面においてはI式とII式の違いがないためである。すなわち、時制構造レベルでは話者視点と関係のない無指定の時間区域があり、その時間区域内に出来事時が生じるという時制構造をもつ。この無指定の時間区域が、時制解釈のレベルで、主節主語の視点に依存する（元話者の私的表現）という間接話法補部のもつ言語環境の特徴から、主節時制の時間区域を受け継ぐと仮定しよう。その結果、接続法で表される補文状況は主節時制と同じ時間区域に所属することになる。（図3参照。）



図3：接続法の時制構造と間接話法補部での解釈パターン

一方、(22) で直説法現在形が使用されている場合は、どのように説明できるのだろうか。われわれの時制理論でどのような解釈のメカニズムが働いているのかを考察してみよう。すでに見たように、直説法の場合は英語と同様、現在形は時制構造レベルで現在時区域をもつ。ドイツ語の場合、これが間接話法補部に生じると、時制解釈レベルで話者視点が主節時にある元話者の視点と合体すると考えられる。

英語の場合は、間接話法補部であっても、話者視点は通例発話時にある伝達者の話者意識と融合するので、現在形を使用すれば補部状況が発話時にも当てはまることになり、(22) のドイツ語の主節時と補文時の時間関係に対応する読みにならない。例えば、Steffie said that Ella is happy では、補文状況が主節時と発話時の両方において真であることを示す。それゆえ、(22) の時間関係を表すためには、英語では過去形が選択される ((23)を参照)。直説法過去形は時間区域が話者視点より時間的に前に生じ、話者視点が発話時と融合することで、その時間区域(過去時区域)は時間軸上の過去時を指す。それゆえ、その中に生じる出来事時は過去の主節時との同時性を表せるが、出来事時が発話時に当てはまる解釈はない。このことは、ドイツ語では間接話法補部のもつ「元話者の視点に依拠する」という言語環境の特徴の方が、「話者視点は原則として発話時にある話者意識と融合する」という時制構造に基づく特徴よりも優先するということを示している。

ここまでの観察から生じてくる疑問として、(1) なぜ現代ドイツ語では現代英語と違って、間接話法補部において接続法が用いられうるのか、(2) なぜ直説法の場合、ドイツ語では言語環境の特徴が優先して、定形述語の時制構造中の話者視点が元話者の発話時(主節時)に結びつくのに対し、英語では時制構造に基づく特徴が優先して、定形述語の時制構造中の話者視点が伝達者の発話時に結びつくのか、という2点が考えられる。C-牽引に基づく説明は、これらの疑問に対して原理的な回答を与えてくれる。

まず1つ目の疑問についてである。ドイツ語では英語と違って、C-牽引が発動しなかったと仮定しよう。すると、発話時に存在する話者意識が活性化することもなく、無標の場合、この意識に吸い寄せられることになる話者視点を含む時制構造をもつ時制形式、すなわち直説法時制形式がそれほど発達しなかったと主張できる。それゆえ、間接話法補部という言語環境では、その特徴と合致する時制構造をもつ時制形式、すなわち接続法時制形式が保持されてきたと説明できる。一方の英語ではC-牽引が発動したため、間接話法補部であっても、活性化した話者意識と融合することになる話者視点を時制構造に含む時制形式、すなわち直説法が発達し、接続法が衰退していったと説明できる。

次に2つ目の疑問に移ろう。これもC-牽引の発動の有無の観点から説明できる。ドイツ語ではC-牽引が発動しなかったと仮定したわけであるが、それはC-牽引の原因である発話時に存在する話者意識の活性化が生じなかったためであった。その結果、現在時の磁場への引き寄せがドイツ語の場合十分ではなく、それゆえ独立節や時間節のように他に話者が存在しない言語環境では、話者視点は発話時にある話者意識と融合するが ((12)を参照)、間接話法補部のように(他の話者である)

元話者の視点の影響下にある言語環境では、その視点の存在する時点（すなわち、主節時）と結びつくことになる。すなわち、元話者の視点のある主節時基準で時制形式が選ばれる。一方、英語ではC-牽引が発動したために、発話時にある話者意識の活性化が生じ、現時の磁場へ引き付ける力は強い。そのため、たとえ元話者の視点の影響下にある間接話法補部であっても、定形述語の時制構造に含まれる話者視点は、活性化した話者意識と融合し、発話時基準で時制形式の選択が行われるのである。

では、ドイツ語でも間接話法補部の時制形式の選択が発話時基準で行われる、(15)のような例はどのように説明されるのであろうか。

(15) a. Er sagte, dass er krank war.

b. Fischer sagte mir, dass Trakl Kokain nahm.

(15)では、補文時が主節時との同時性を表すのに直説法過去形が用いられていて、英語の(23)の例のように、いわゆる時制の一致を示している。この点について、d'Alquen (1997: 166-169)は、ドイツ語の補文節の過去形が主節の過去形の表す時点と同時を表せるのは、補文状況が主節状況とは独立して解釈できる適切な文脈が与えられた場合においてであると述べている。この考えに従えば、ドイツ語で直説法過去形を使って過去形の主節動詞の表す時との同時性を表せるのは、いわゆる透明読み (de re/transparent reading) の場合と言うことになる。すなわち、伝達者が自らの視点から補文状況の真実性 (事実性) に関与している場合である。⁴

この点については、次のように説明できる。ドイツ語ではC-牽引が発動しなかったために、間接話法補部における直説法時制形式の選択の基準点が元話者の発話時 (= 主節時) となるのがふつうだが、有標の場合として透明読みであることを明示したい時に、そのことをはっきりと表せる時制形式である過去形が用いられるのである。

このことは、過去形の叙実述語の補部において、補文時が主節時との同時性 (だけ) を表すには、直説法過去形を用いる必要があることから支持される。

(16) Er wusste, dass er krank {war/(ist)/*sei/*wäre}.

叙実述語は、その使用者である伝達話者が補文内容の真実性を前提としていることを示すので、この言語環境では必ず透明読みになる。それゆえ、(15)において透明読みが可能な場合に、補文状況を指すのに直説法過去形を使って同時性を表せるという主張の傍証となる。

この叙実述語の示す言語環境の特徴は、ドイツ語特有ではなく、日英語についても言える (cf. Wada 2004)。

(24) 陽子は、その時徴が傷ついていたことに気づかなかった。

(25) John realized that Mary was pregnant. (Lee 1993: 222)

ここで特に注意されたいのは、日本語の例である。日本語では、間接話法補部の時制形式の選択は、ドイツ語と同じく通例主節時基準となるが、叙実述語の補部においては発話時基準となる。それゆえ、この問題は、言語タイプにかかわらず、叙実述語の補部という言語環境のもつ特徴に帰するこ

とができると思われる。

また、ドイツ語の叙実述語の補部における直説法現在形の指す時間関係が、英語の場合と同じであることも、ここでの主張点を裏付ける。(16)で現在形istを用いた場合、英語の場合と同様、補文状況は主節時と発話時の両方において真であることを示す。英語の直説法はすでに見たように、発話時基準の時制形式の選択を受けることから、この場合のドイツ語の例も同様に発話時基準で時制形式が選択されると言える。

最後に、(16)に示されるように、なぜ叙実述語の補部において接続法が用いられないかを簡単に説明しておこう。すでに見たように、時制構造レベルでは、接続法の述語の時制構造に無指定の時間区域が含まれ、それが時制解釈レベルで、主節述語のもつ時間区域に結びつくことが要求される。一方、叙実述語の補部は発話時基準の時制形式の選択を要求する。それゆえ、両者が要求する中味に矛盾が生じることになり、非文になると説明できる。

以上から、ドイツ語の間接話法補部における時制現象が英語のそれと違っているのは、共に公的自己中心の言語でありながら、ドイツ語ではC-牽引という概念が発動しておらず、そのために現在時の磁場に引き寄せられることがなかった結果であるとまとめられる。このことは、公的自己中心性は少なくとも強弱の2つのカテゴリーからなるものとして捉えられるべき概念であり、C-牽引が発動があった英語の方が、その発動が無かったドイツ語に比べて、公的自己中心性が高い言語であると言い換えることができる。次節では、この節での説明の妥当性を高めるために、間接話法補部以外における英語とドイツ語の時制現象の違いも、このC-牽引の有無によって説明できることを見ていく。

5 その他の時制現象の相違への応用

5.1 現在完了形の意味機能の相違

その他の英語とドイツ語の時制現象の相違の例として、まず現在完了形が表す意味範囲の違いを見てみる。

(26) *He has written a letter to Ryoko yesterday.

(27) Er hat gestern einen Brief an Ryoko geschrieben.

(彼は昨日良子に1通の手紙を書いている。)

このパラダイムから明らかなように、英語と違ってドイツ語の現在完了形は過去の定時点(特定時)を指す副詞類と共起でき、英語の過去形が担う意味機能をもっている。

この事実について、まずWada (2002)の説明を見てみよう。Wadaの一連の時制理論では助動詞も語彙動詞と同様1つの出来事時を表すと考えているので、完了形は2つの出来事時、すなわち完了の助動詞(have/habenまたはsein)の出来事時(E_1)と過去分詞の出来事時(E_2)を、その時間図式内にもつ。 E_1 は定形述語の出来事時なので時間区域の中に生じ、 E_2 は非定形述語の出来事時なので時間区域とは直接関係なく、定形述語の出来事時 E_1 を基準点としてその位置が決まっ

てくる。現在完了形の場合、英語では、話者がどの出来事時に注意を払っているかを示す概念である時間焦点 (Temporal Focus = TF) が発話時を含む現在時に当てはまる E_1 に置かれるが、ドイツ語では時間焦点は過去時に当てはまる E_2 に置くことができる。この場合のドイツ語の現在完了形では、話者の注意は過去時に向いており、過去形相当機能をもっていると考えられる。^{5, 6}

なぜ時間焦点の位置に差ができたのかについては、以下のような説明がなされている。英語の完了形はドイツ語の完了形に比べて完了の助動詞と過去分詞との連結度合い、すなわち、凍結性 (frozenness) が強く、そのため非定形動詞である過去分詞が定形動詞の影響下に置かれやすい時間図式になっている。この凍結度の違いを仮定する根拠としては、(主節において) ドイツ語の現在完了形という鑄型を構成する2つの要素 (完了助動詞と過去分詞) は目的語を挟み込む枠構造になっていて、互いに横並びになっていないこと、ドイツ語の一部の自動詞の完了形は助動詞がsein 'be' であり、完了形を形成するパターンが複数あること、などが挙げられている。これらの事実は、英語に比べてドイツ語の現在完了形の2つの構成素の結びつきの弱さを反映していると考えられる。この英語の完了形の凍結度の強さに加えて、英文法における現在時の特異性が関係してくる。英語では現在時は際立った (salient) 概念であるため、英語の現在完了形の時間焦点は現在時に当てはまる E_1 から移動しにくかったと主張されている。一方のドイツ語の場合は、(E_1 と E_2 の凍結度が低いため) 過去時に当てはまる E_2 が定形動詞の影響を受けにくい時間図式であり、かつ、現在時の特異性もないため、時間焦点は E_1 に固定する必要がなかったと述べられている。

しかし、この説明では、現在時の特異性とは何のことを指し、そもそもなぜドイツ語と違って英語にはこの特異性が見られるのか、という疑問が依然として残る。本稿で導入したC-牽引は、この問いに対する答えを与えてくれる。発話時に存在する牽引先の話者意識が活性化し、その結果、英語の現在時が際立つようになり、特異化してきたと言えるからである。そして、このC-牽引のために、時間の流れの中で、時制鑄型である現在完了形 (の意味構造) が際立ちを放つ現在時の磁場に引き寄せられてきたと説明できる。それゆえ、現代英語の現在完了形は、現在時部分に話者の注意が向かうような時間図式、すなわち時間焦点が E_1 に置かれる図式となっているのである。一方のドイツ語にはC-牽引の発動がなかったため、現在時の特異性が顕著に現れることはなく、その結果、時制鑄型である現在完了形が現在時の磁場に引き寄せられる必然性がなかった。それゆえ、時間焦点が現在時以外の時間、すなわち過去時に当てはまる E_2 に向けられることも可能であったと説明できる。以上をまとめると、英語の現在完了形の表す意味構造・意味機能が、現在時との関連性を保障するようなものに限定されているのは、C-牽引発動の結果であったと言える。

5.2 現在完了形の文法化

ドイツ語を含む印欧語の多くで現在完了形が Perfectiveの段階 (過去時制機能) を表すことができるのに対して、英語の現在完了形は原則として Perfectの段階 (現在完了機能) でとどまっている。(28) は、Bybee, Perkins and Pagliuca (1994) で述べられている、(ドイツ語と英語を含む)

多くの印欧語系の現在完了形の文法化における意味機能の拡張の流れを図式化したものである（英語についての詳しい観察は、Carey 1995, 1996を参照）。⁷

(28) Resultative Perfect (Anterior) Perfective (Simple Past)

しかし、Elsness (1997: 289-294)によれば、英語の現在完了の意味範囲は、むしろ過去を表す（単純過去に近い）意味から徐々に現在完了の意味に狭まってきていると言う。この主張の根拠として、現在完了形と過去の副詞類との共起性は、中英語か近代英語初期くらいまでは頻度は少ないが、現代英語よりはあったという、先行研究で指摘されている事実観察を挙げている（cf. Elsness 1997: 250）。^{8, 9}

(29) ...which I have forgot to set down in my Journal yesterday.

(Elsness 1997: 250より再掲載)

この一見矛盾するように思える両者の主張に対して、われわれの枠組みは次のように回答を与えることができる。まず、Elsnessの主張の根拠となる(29)のような現在完了形は、まだ凍結度の強い時制鑄型として確立していなかったと考える。この考えを主張する根拠は以下の通りである。英語の完了形も中英語期の14世紀ごろまではhave (E₁) + 過去分詞 (E₂) の語順が横並びではないものも残っていた（例えば、I have my dissertation finishedのような枠構造であった）。仮にC-牽引の発動が中英語終わりから近代英語初期ごろであったとしよう（この仮定は、次の5.3節でその妥当性をさらに高められることになる）。すると、（完全にではないが）この時期以降、現在完了形と過去の定時点副詞との共起例が減少していったという事実を説明できる。現在完了の意味範囲が現在の磁場へと引き寄せられていき、現代英語の現在完了の意味用法に近づいていったためと主張できるからである。¹⁰ この主張が正しければ、14世紀末あたりから近代英語初期あたりまでに、完了形の語順はすでに横並び構造になっていたが、まだC-牽引発動前であったため、過去分詞のE₂は完了のhaveのE₁が存在する現在の磁場の影響を受けておらず、それゆえに過去の定時点副詞と共起できたとと言える。^{11, 12}

この主張は、横並びであっても、時制鑄型となっていなければ、非定形述語が過去の定時点副詞類と共起する場合が英語にもあるという事実からも間接的に支持される。

(30) I remember playing tennis with her last summer.

(30) では、定形述語の現在形rememberと非定形述語（動名詞）playingは横並び構造であるが、動名詞は独立したユニットであり、定形述語と合体して時制鑄型を形成していないため、定形述語の現在の磁場の影響を受けず、過去の定時点副詞と共起できると言えるからである。

では、Bybee, Perkins and Pagliuca (1994) の現在完了の意味機能の拡張の方向性について、英語とドイツ語で違いが見られることは、どのように説明されるのだろうか。これは、次のように説明できる。ドイツ語ではC-牽引が発動しなかったために、現在の磁場に現在完了形が引き寄せられることもなかった。それゆえ、(28) の流れに従って意味拡張が進んでいったと考えられる。Gerritsen (1984: 123) によると、ドイツ語では12世紀ごろに完了形が過去時制機能を受け継いで

いったと言う。歴史的事実としてドイツ語の完了形の発達のほうが英語のそれよりも早かったことを考えると、英語の現在完了形はドイツ語のそれより遅れた中英語期のどこかで過去時制機能を持ち始めたという仮説が立てられる。この仮説は、Elsness (1997: 250) の「中英語から近代英語初期には現在完了形と過去の副詞類の共起例が現代英語よりも存在した」という観察によって支えられる。ただし、文法化による意味機能の拡張が連続的であったとすると、この過去時制機能を持ち出した段階はPerfectとPerfectiveの特徴を併せもつ段階だったと考えられる (Heine 1993)。そして、まだ現在完了形の意味機能として過去時制機能が定着する前にC-牽引が発動し、その結果その意味範囲は現在時の磁場に引き寄せられていった (過去時制機能を失っていった) と考えることができる。¹³ この主張は、17世紀以降、現在完了形の意味範囲が急速に現代英語のそれに近づき、過去形との住み分けが確立されていったというVisser (1966: 751) の観察によっても裏付けられる。

5.3 現在進行形

進行形という文法形式 (時制鑄型) が現代英語には存在するのに、現代ドイツ語には存在しないことは良く知られている事実である。¹⁴ (32)のドイツ語の現在形は、「今現在ドイツ語を勉強中である」という発話時において進行中の状況を表すことができ、この解釈の場合、英語では (31) のように現在進行形になる。

(31) I am learning German.

(32) Ich lerne Deutsch.

なぜ、このような差が見られるのかについても、われわれのC-牽引に基づく説明は回答を与えてくれる。まずは事実観察から始める。進行形の原型は古英語期からすでに見られたというのが通説である (Baugh and Cable 1993: 286-287, Fennell 2001: 105, 145, Mitchell and Robinson 1986: 110-111)。

(33) ac gyrstandæg ic wæs on huntunge.

but yesterday I was at hunting (Denison 1993: 387)

(34) thane thei ben not scornynge of God but worschipyng.

then they are not scorning of God but worshipping (Denison 1993: 388)

(33) は古英語期に見られた「be + 前置詞 + ~ing」構文の例であり、(34) は中英語期に見られた「be + ~ing + of + NP」構文の例である。しかし、これらの例からも明らかなように、この時代にはまだ「be + ~ing + NP」の形にはなっていない上に、時制鑄型としての進行形として定着したのは近代英語期になってからである (Gerritsen 1984: 126)。¹⁵

次に、現代英語の進行形のもつ意味機能について考える。以下に示すように、進行形には様々な用法が認められる。

(35) a. Renaat is dancing with Magda now.

- b. This fall, the jet stream is flowing unusually far north and west, locking the cold air into the interior of North America, leaving us on the edges of a warm air mass. (The Times Herald-Record, *December 04, 2001* (from *Google*))
- c. I am living on Leiestraat in Kortrijk.
- d. Akiko and Saki are coming to Belgium next May.

(35a)は目の前で行われている動作を、(35b)は習慣的な一時的状況を、(35c)は状態動詞の進行形で、単純形よりも一時性の強い状況をそれぞれ表すと言える。¹⁶ (35d)は近接未来を表す用法である。この用法は、もともと現在進行中の状況を表していたものが、メトニミー的に未来時を指せるようになった派生的用法であり、本稿では取り扱わない。¹⁷ ここで注目されたいのは、(35a-c)の進行形の意味に共通する特徴が、基準時（現在進行形の場合、発話時）における一時的状況を表すという点である。そして、最も基本的な用法と思われる(35a)タイプについては、その単純形版では習慣・普遍的特性などを表し、必ずしも発話時においてその状況が進行していなくても良いのに対し、進行形版は発話時において現在進行中の状況を表すと解釈される。この事実を、われわれの観点から捉えなおすと、基本的に現在進行形は話者意識の存在する発話時において実際に当てはまっている状況を積極的に描写する時制鑄型ということになる。こう主張する根拠の1つとして、伝統文法において(KruisingaやPoutsumaなど)、進行形は「事件の進行の中に話者が身を沈め、事件が眼前で展開されてゆくのを具象的に描く(太田 1954)」のに用いられる、と述べられていることが挙げられる。実際、古英語期において進行形の原型は単純形と意味的に大差がないと言われる中、これに近い意味を表していたとする説もある(cf. 太田 1954: 55)。以上の観察を基にすると、現在進行形は話者意識が強く関与する、発話時において実際に当てはまっている状況を描写する文法化された形式ということになる。¹⁸

こう考えると、いまやなぜドイツ語と違って、英語で(時制鑄型としての)現在進行形が発達したのかが、C-牽引の観点から説明できる。¹⁹ 英語では、C-牽引が中英語期終わりから近代英語初期ごろに発動した結果、発話時における話者意識が活性化し、時制体系の中に占める話者意識の位置づけが重要になっていった。これが引き金となって、発話時における状況を(話者意識が深く関与するために)生き生きと表現できる形式であった進行形の原型が、話者意識の存在する基準時(発話時)において実際に当てはまる状況を表せる専用の形式として機能するようになっていったと考えられる。すなわち、活性化した話者意識の存在する現時の磁場に引き寄せられることで、そのような意味機能を表す時制鑄型として発達していったのである。その結果、現在進行形と住み分けのような形で、単純現在形は(状態動詞の場合やスポーツの実況中継などの場合を除いて)発話時において実際に当てはまる状況を表せなくなっていったと考えられる。

一方のドイツ語では、C-牽引は発動しなかった。それゆえ、話者意識がドイツ語の時制体系の中では(英語の場合のように)活性化せず、活性化した話者意識の関与を積極的に表す時制鑄型の発達もなかったと言える。その結果、ドイツ語では、もともと単純現在形で現在進行中の動作を

表せたのが、現代でもそのまま引き継がれていると説明できる。C-牽引の発動がドイツ語にはなかったために、発話時における話者意識の関与を強く表せる専用の形式、すなわち現在進行形の発動がドイツ語にはなかったと言えるのである。

5.4 単純現在形の未来時指示

最後に英語とドイツ語の単純現在形が表す意味範囲の違いもC-牽引の発動の有無で説明できることを見ておく。

良く知られているように、ゲルマン語系言語では、未来を表すのに昔は単純現在形が用いられていた。例えばドイツ語では14世紀ごろまでは未来はもっぱら単純現在形で表されていたし、英語でも中英語期ではまだ単純現在形で普通に未来時を指していた (cf. Blake 1992: 241)。それが、(中英語期初期ごろから) 次第に分析的な (analytic) 時制形式が派生してきて、未来を表す形式として用いられるようになっていったのである (Gerritsen 1984: 120f)。例えば、ドイツ語だと werden + 不定詞、英語だと will + 不定詞という具合である。ドイツ語の werden + 不定詞構文は15世紀ぐらいから台頭してきたのに対し (三好 1968: 125)、英語の will + 不定詞構文は古英語期末ごろから台頭し、中英語期までに確立したと言う (Denison 1993: 304, Fennel 2001: 105)。ここで問題にしたいのは、未来時を表す分析的な時制形式が存在するようになった後でも、ドイツ語の単純現在形は依然として、文脈的に明らかであれば自由に未来を指せるのに対し、英語では単純現在形による未来時指示の制限がかなりきつくなったのはなぜかという点である。

まず、われわれの時制理論では、単純現在形が絶対時制部門に現在時区域を確立することを思い出してもらいたい。話者視点が発話時にある話者意識と融合した場合 (これが無標の場合であるが)、この現在時区域は現在時と未来時をカバーする時間帯となる (cf. Wada 2001: 33)。それゆえ、時制構造的には単純現在形は未来時も指せるのである。これは、英語もドイツ語も同じであり、それゆえ昔は両言語において、文脈的に明らかであれば自由に単純現在形で未来を指せたと考えられる。

では、なぜ現代英語では単純現在形で未来時を指すのに制限がきついのに対し、現代ドイツ語ではそれほどではなく、むしろ文脈から未来時指示が明らかであれば、分析的な時制形式よりも単純形が好まれるのであろうか。²⁰ 例えば、ドイツ語の場合、(37b)の方が(37a)よりも自然である。

(36) a. We will be back again in ten minutes.

b. ??We are back again in ten minutes.

(37) a. In zehn Minuten werden wir wieder da sein.

b. In zehn Minuten sind wir wieder da.

この問題もC-牽引によって説明がつく。本稿で仮定しているように、英語でのみC-牽引が中英語期終わりから近代英語期初期にかけて発動したとしよう。その結果、単純現在形が現在時の磁場に引き寄せられ、その意味範囲が現在時に限定されていったと言えるからである。また、未来を指

す分析的時制形式も、willを予測のモダリティを表す現在形と考えれば、willの時制構造自体は話者意識、すなわち命題に対する心的状態・態度の主体の存在する発話時に引き寄せられるので、ここでの主張と矛盾しない。²¹（この形式で未来時に言及する部分は、現在時区域を直接含まない時制構造をもつ不定詞部だからである。）一方のドイツ語は、C-牽引が発動しなかったために、単純現在形の現在の磁場への引き付けはなかった。それゆえ、単純現在形で未来時を指せる状態が保持されたのである。未来を指す分析的時制形式が発達した後でも、時の副詞との共起などではっきりと未来時指示と分かる場合には独立節において単純現在形で未来時を指す方が自然であるのは、分析的な時制形式の方が歴史的に後から発達した形であるために、昔からある単純現在形にとって代わるまでに至っていないためと考えられるからである。

別の観点から述べると、英語と違ってドイツ語は現在の磁場への引き寄せがない分、モダリティとしては「断定（記述内容を事実として断定して述べるモダリティ）」を表す単純時制形でもって未来の出来事を断定的に述べることができると言える。つまり、通例未来のことは未実現なので断定はできないが、現在の磁場への引き寄せがない分、文法体系としては現在時と未来時の区別が漠然としており、現在時区域全体（現在時と未来時を含む）に断定の効力が及びやすいと言える。一方、英語では現在の磁場への引き寄せがある分現在時が際立ち、その結果文法体系として現在時と未来時の区別がかなりはっきりすることになり、断定の効力が及び範囲は通例断定できる現在時における出来事・状況のみということになったと考えられる（cf. Wada 2002: 356-357）。

6 おわりに

本稿では、話者概念の解体に基づく言語類型論的な観点からはともに公的自己中心の言語に位置付けられる英語とドイツ語において、その時制構造は基本的に同じであるのに時制現象の相違が見られるのはなぜか、という問題設定を行い、C-牽引という概念の発動の有無が、両言語の歴史を通して時制現象の相違という形で表面化してきたと主張してきた。Wada (2001) で提案された時制理論とHiroseの私的自己・公的自己に基づく言語類別による説明にC-牽引という概念を導入することで、英語とドイツ語の間接話法補部における時制現象の違い、現在完了形の表せる意味範囲の違い、現在完了形の文法化の流れにおける到達段階の違い、現在進行形のありなし、単純現在形による未来時指示の起こりやすさの違い、を統一的な観点から説明できることを見てきた。

本稿の結論は、次のような理論的含蓄をもつ。自然言語の分類法の1つとして私的自己・公的自己というパラメータに基づく大枠の分類が一方であり、その分類によって公的自己中心言語に属する言語の中でも、C-牽引の発動の有無によって公的自己中心性の度合いが言語間によって異なってくることになる。今後、他の言語の時制現象も調べることで、この点をさらに詳しく追求していきたい。

注

* 本稿の作成にあたって、筑波大学の大矢俊明氏にはドイツ語のデータ情報ならびに文献情報で大変お世話になり、かつ草稿にも目を通していただいた。また、筑波大学の廣瀬幸生先生と成蹊大学の森雄一氏には草稿の段階で目を通していただき、貴重なコメントをいただいた。記して感謝の意を表したい。なお、本稿は、文部科学省在外研究ならびに科学研究費補助金（基盤研究C）・「時制とその周辺領域の統語的・意味的研究」（課題番号15520311）の研究成果の一部である。

- 1 本稿では、新正書法に従って、オリジナルの文献でßを用いているところもssと綴ることにする。
- 2 叙実述語の特徴については、詳しくはKiparsky and Kiparsky (1970), Hooper (1975) を参照。
- 3 このことは必ずしも、常に直説法が補文内容の事実性に關与し、接続法は關与しないと主張しているわけではない。大矢俊明氏（個人談話）が指摘するように、多くのドイツ語の文法書で直説法と接続法の意味機能の使い分けがはっきりしない場合があると述べられている。この傾向は、現代ドイツ語の、特に話し言葉で顕著である。本稿では、原則的に両者の意味機能が区別される場合のみを扱うことにする。また、接続法I式とII式についても、前者が補文内容の事実性についての中立性を、後者が疑念を表す場合に用いられることもあるが、接続法I式と直説法が同じ形式の場合は、接続法であることを明記するために接続法II式を用いることもあるなど、これらの使い分けには文体上の要因もかなり関係してくる。
- 4 d'Alquen (1997: 167) では、Latzelのgeneralityという概念による説明に従って、(15) のような直説法過去形は一般的でない状況を表すのに対し、その直説法現在形版は一般性の高い状況を表すと述べている。この点については、今後詳しく調べたい。
- 5 なぜドイツ語の現在完了形は過去の定時点を指す副詞類と共起でき、英語の現在完了形はできないのかについての原理的な説明は、Wada (2002) を参照されたい。
- 6 このことは、ドイツ語の現在完了形はもはや現在完了の機能をもたないと主張しているわけではない。(i)の例は、英語の現在完了と同じ機能をもつ。

(i) Ich habe Ihre Aufsatz soeben zu Ende gelesen. (三好 1968: 121)

'I have just finished (reading) your paper.'

この場合の時間図式は、英語版と同じである。

- 7 ここで彼らがPerfectの代わりにAnteriorを用いているのは、Perfectiveという用語との混同を避けるためである。また、PerfectiveとSimple Pastは厳密には異なる概念である。前者は基準点（発話時とは限らない）において完結しているとみなされる状況をさすが、後者は非完結性を表す (Imperfective) 状況にも当てはまる概念である。しかし、Bybee, Perkins and Pagliuca (1994: 82-85) で述べられているように、Perfectiveの場合は事実上過去時の状況をさす上に、ゲルマン語系言語のようにImperfectiveを表す専用の形式をもたない言語では、

PerfectiveがSimple Pastの機能を果たすので、ここで図式化されているようになっている。

- 8 現在完了形という構文がいつから始まったかを特定するのは難しい問題であるが、本稿では Elsness (1997: 242) に従って、古英語期からすでに現在完了形構文は存在していたという立場をとる。これは、語順がまだ横並びでなく枠構造だったころの同構文も現在完了形であると認めることであるが、そうしないとドイツ語の現在完了形構文との比較ができないという理由もある。
- 9 本稿では、Fennell (2001) に従って、古英語期を紀元後500～1100年、中英語期を1100～1500年、近代英語期を1500～1800年、現代英語期を1800年～現在と考える。
- 10 この仮説は、Elsness (1997: 250) で述べられている、英語では近代英語初期以前は現在完了形と単純過去形の意味機能の混在が見られたが、この時期以降住み分けが急速に進んでいったという観察からも支持される。C-牽引により、この時期以降現在完了形の意味範囲が現在の時の磁場に引き寄せられた結果、現代英語の現在完了形の意味範囲と基本的に同じになっていき (Denison 1993: 352)、その影響を受けて過去形が現在の時の磁場の影響がない意味機能に限定されていったと考えられるからである。
- 11 しかし、5.1 節で見たように、英語の完了形が横並び構造になっていたからこそ、ドイツ語と違い、完了の助動詞と過去分詞との凍結性が高まり、C-牽引によって現在の時の磁場に引き寄せられる下地にはなっていたと考えられる。
- 12 英語でも古英語期には、ドイツ語と同じように、自動詞の場合には「be + (形容詞機能の) 過去分詞」、他動詞の場合には「have + (形容詞機能の) 過去分詞」で完了形の意味機能は表されていた。また、前者では主語と、後者では目的語と人称・数などの一致があった (cf. Denison 1993: Ch.12, Elsness 1997: 239)。これが、14世紀ごろにおける語順の横並び化の完了と、時制鋳型化の進行に伴い、過去分詞は定形動詞の影響下に入り、人称・数の一致現象を示さなくなっていくと考えられる。
- 13 C-牽引発動によって英語の現在完了形の意味範囲が現在の時の磁場に引き寄せられていることを示す別の根拠として、ドイツ語の現在完了形にはない「継続」用法が英語の現在完了形にはあるという事実を挙げることができる。
- 14 大矢俊明氏 (個人談話) が指摘するように、ドイツ語にも「周辺の進行形相当構文」は存在する。例えば、「sein + 前置詞(an, bei, in) + ~」構文があるが、これは標準語や書き言葉では用いられにくい上に、前置詞の後には自動詞しか来れないという点で、完全に時制体系に組み込まれた (十分に文法化した) 時制鋳型としての進行形とは異なると考えられる。
 - (i) a. Er ist am Schreiben/Arbeiten.
'He is writing/working.'
 - b. Er ist beim Arbeiten.
'He is working.'

また、「sein + 形容詞 + ~」構文もあるが、これもさほど一般的ではない。

(ii) Ich bin gerade mit Schreiben beschäftigt. (Curme 1970: 248)

‘I am now working.’

それゆえ、本稿では十分に文法化した時制鑄型としての進行形はドイツ語にはないとする。

- 15 古英語期の進行形の原型は確かに機能的には進行形に似ているが、数が少ないこととラテン語の翻訳のときに使われている場合がほとんどであることから、まだこの時期には現代英語で言うところの進行形には程遠いものだった。また、この時期進行形は単純形と意味的に大差がない場合が多かった (Mitchell and Robinson 1986: 110)。中英語でも初めのうちはまだ稀であったが、徐々に広まっていき (Lass 1999: 216)、近代英語期にかけて定着してきたと言える。これは、進行形の数が17世紀の間に急速に増えたというElsness (1997) の観察によっても経験的に支持される。ただし、近代英語においてさえ、今日では現在進行形が用いられるところで単純現在形がまだかなり使われていたという観察もある (Lass 1999: 221)。
- 16 状態動詞の進行形の場合は、単純形の場合とあまり意味が変わらない場合が多いと言われる。Smith (1983) は、この点を見方の相違という観点から説明している。
- 17 この近接未来用法の進行形についての詳しい説明に関しては、Huddleston (1977), Prince (1982), Smith (1981) を参照されたい。
- 18 この点についての最近の研究として、山岡 (1997) は、状態・非状態動詞の区別にかかわらず、進行形は対象となる事象に対して話者の意識の集中が向けられている場合に用いられるものであり、対象に意識を向けるという話者の心理的未完了性を表すと述べている。これは、われわれの枠組みで言うところの、話者意識を色濃く反映した時制鑄型が現在進行形であるという主張と合致する。
- 19 ここで過去進行形の場合はどうなるのかという問題が出てくるが、これも基本的に同様の説明ができる。例えば、Banfield (1982) や Ehrlich (1990) は、物語のテキストにおいて過去進行形が用いられるのは、描出話法部で登場人物の意識が関与していることを表す場合や、ナレーターが眼前の状況を描写するための表現手段としての場合であると述べているが、これにより、過去進行形を過去の基準時 (物語の現在時) における活性化した話者意識の関与する時制鑄型と捉えることができるので、現在進行形の場合と並行的に捉えることができると思われる。ただし、過去形なので現在時の磁場へ引き寄せられることはない。
- 20 英語では、単純現在形による未来時指示は、原則として時刻表や確定した計画などに基づく「確定未来」を表す、いわゆる未来構文 (Futurate Sentence) の場合に許される。この用法については、和田 (2001b) を参照されたい。
- 21 Lass (1999: 211) は、will/shallがいわゆる真の助動詞 (本稿の予測モダリティを表す助動詞に対応) になったのは近代英語期と述べているが、それも本稿の主張を支える根拠になる。モダリティを「発話時における話者の主観的な心的態度・状態」と定義すると、C-牽引発動後、

willの時制構造が急速に現在時の磁場に引き寄せられていったと考えられるからである。

参考文献

- Banfield, Ann (1982) *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*. Boston, London, Melbourne and Henley: Routledge & Kegan Paul.
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable (1993) *A History of the English Language*. Fourth Edition. London: Routledge.
- Blake, Norman (ed.) (1992) *The Cambridge History of the English Language Volume II (1066-1476)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Carey, Kathleen (1995) "Subjectification and the Development of the English Perfect." *Subjectivity and Subjectivisation*, ed. by Stein Dieter and Susan Wright, 83-102. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carey, Kathleen (1996) "From Resultativity to Current Relevance: Evidence from the History of English and Modern Castilian Spanish." *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adele E. Goldberg, 31-48. Stanford: CSLI Publications.
- Chafe, Wallace (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Curme, George O. (1970) *A Grammar of the German Language*. Second Revised Edition. New York: Frederick Unger.
- d'Alquen, Richard (1997) *Time, Mood and Aspect in German Tense*. Frankfurt: Peter Lang.
- Denison, David (1993) *English Historical Syntax*. London: Longman.
- Ehrlich, Susan (1990) *Point of View: A Linguistic Analysis of Literary Style*. London: Routledge.
- Eisenberg, Peter (1999) *Grundriss der Deutschen Grammatik*. Band 2: der Satz.
- Elsness, Johan (1997) *The Perfect and the Preterite in Contemporary and Earlier English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Fennell, Barbara A. (2001) *A History of English: A Sociolinguistic Approach*. Oxford:

Blackwell.

- Gerritsen, Marinel (1984) "Divergent Word Order Development in Germanic Languages: A Description and a Tentative Explanation." *Historical Syntax*, ed. by Jacek Fisiak, 107-135. Berlin: Mouton.
- Heine, Bernd (1993) *Auxiliaries : Cognitive Forces and Grammaticalization*. Oxford : Oxford University Press.
- Helbig, Gerhard and Joachim Buscha (1977) *Deutsche Grammatik, Ein Handbuch für den Ausländerunterricht 4*. Leipzig: Durchgesehene Auflage. [在間進 (訳) 『現代ドイツ文法』三修社.]
- Hirose, Yukio (1995) "Direct and Indirect Speech as Quotations of Public and Private Expression." *Lingua* 95, 223-238.
- 廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」中右実 (編) 『指示・照応・否定』研究社. 1-89.
- Hirose, Yukio (2000) "Public and Private Self as Two Aspects of the Speaker: A Contrastive Study of Japanese and English." *Journal of Pragmatics* 32, 1623-1656.
- Hirose, Yukio (2002) "Viewpoint and the Nature of the Japanese Reflexive *Zibun*." *Cognitive Linguistics* 13, 357-401.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2001) 「日本語から見た日本人<上・下>」『月刊言語』30巻1号, 86-97, 同2号, 102-112.
- Hooper, Joan (1975) "On Assertive Predicates." *Syntax and Semantics* 4, ed. by John Kimball, 91-124. New York: Academic Press.
- Huddleston, Rodney (1977) "The Futurate Construction." *Linguistic Inquiry* 8, 730-736.
- Kipersky, Paul and Carol Kipersky (1970) "Fact." *Progress in Linguistics*. ed. by Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph, 143-173. The Hague: Mouton.
- Langacker, Ronald (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald (1990) "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.
- Langacker, Ronald (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Volume II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald (1998) "On Subjectification and Grammaticization." *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*, ed. by Jean-Pierre Koenig, 71-89. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lass, Roger (ed.) (1999) *The Cambridge History of the English Language Volume III (1476-1776)*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Lee, Kiri (1993) *Tense Interpretation in Complex Sentences in English and Japanese*. Ph.D. Dissertation. Harvard University.
- Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson (1986) *A Guide to Old English*. Fourth Edition Revisited with Prose and Verse Texts and Glossary. Oxford: Basil Blackwell.
- 三好助三郎 (1968) 『独英比較文法』 郁文堂.
- 太田朗 (1954) 『完了形・進行形』 研究社.
- Prince, Ellen (1982) "The Simple Futurate: Not Simply Progressive Futurate Minus Progressive." *Papers from the Eighteenth Regional Meeting of CLS*, 453-465.
- Smith, Carlota S. (1981) "The Futurate Progressive: Not Simply Future + Progressive." *Papers from the Eighteenth Regional Meeting of CLS*, 369-382.
- Smith, Carlota S. (1983) "A Theory of Aspectual Choice." *Language* 59: 479-501.
- Traugott, Elizabeth Closs (1989) "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change." *Language* 65: 31-55.
- Traugott, Elizabeth Closs (1995) "Subjectification in Grammaticalisation." *Subjectivity and Subjectivisation*, ed. by Stein Dieter and Susan Wright, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Visser, Theodor (1966) *A Historical Syntax of the English Language 2: Syntactical Units with One Verb*. Leiden: Brill.
- Wada, Naoaki (2001) *Interpreting English Tenses: A Compositional Approach*. Tokyo: Kaitakusha.
- 和田尚明 (2001a) 「英語の完了形・日本語の完了形相当表現の時間構造と定時点副詞類との共起性」 『言語研究』 119, 77-110.
- 和田尚明 (2001b) 「英語の単純現在形に対する統一の説明」 『筑波英語教育』 22号, 1-16.
- Wada, Naoaki (2002) "A Comparative Study of the English Present Perfect and the German Perfekt: With Special Reference to Their Differences in Co-occurrence with Adverbials Referring to a Definite Time." *English Linguistics* 19, 335-365.
- 和田尚明 (2002) 「時制現象から見た日英語比較 間接話法と物語文を中心に一」 『茨城大学人文学部紀要 (コミュニケーション学科論集)』 12号, 11-34.
- Wada, Naoaki (2004) "Tense Phenomena in Direct, Indirect and Represented Speech: A Contrastive Study of Japanese and English." Ms. Catholic University of Leuven at Kortrijk.
- 山岡實 (1997) 「談話における進行形」 『英語語法文法研究』 4, 21-36.